

# 高齢者大学を卒業したシニアのプロダクティブ・エイジングに関する研究

## Productive Aging for the Elderly-Who Studied at Senior Citizens College

研究員 藤 原 博 史

### 抄 録

本研究の目的は、高齢者大学の学生が、在学中または卒業後、社会貢献活動を始めるにあたり影響を受けたと思われる要因を明らかにし、高齢者大学が果たすプロダクティブ・エイジングの可能性について考察することである。そのため、高齢者大学の一つである神戸市シルバーカレッジをケーススタディに選び、同カレッジ卒業生に対して質問紙調査を実施した。その結果、次のことが明らかになった。(1) 卒業生が社会貢献活動（ボランティア活動）を始めるにあたり影響を受けた要因は、在学中のボランティア活動の実践とパフォーマンスのスキルを培うクラブ活動であった。(2) 社会貢献活動（ボランティア活動）は、日々の積極的な行動や友人との交友関係にプラスの影響を与え、シニアの活動力を生み出していた。これらのことから、高齢者大学を卒業したシニアのプロダクティブ・エイジングは、高齢者大学における課外活動にその可能性を見出すことができる。

**Key Words：** 高齢者大学、シニア、社会貢献活動、プロダクティブ・エイジング

## 1. はじめに

### 1.1. 高齢者の社会参加活動の現状

2011年に内閣府が行った「高齢者の経済生活に関する意識調査」によれば、60歳以上の高齢者の47.1%が1年間の間に何らかの地域活動、ボランティア活動に参加している。その内容は、複数回答ではあるが、「自治会・町内会等の活動」が28.2%、「地域環境美化の活動」が17.3%であるのに対し、「高齢者介護支援の活動」は4.8%、「障害者支援の活動」は3.8%、「子育て支援の活動」は3.6%などであった<sup>(1)</sup>。このように、高齢者の社会参加活動は地縁に基づく行事参加の割合が高く、他者への奉仕活動の割合は低い

という結果が表れており、地域社会において求められている活動に多くの高齢者が参加していることがうかがえる。

さて、「社会参加活動」の定義については統一した見解はないが、芳賀博（2012）は、(1) 家庭外での対人活動であること、(2) 自主的活動であること、(3) 集団として行う活動であること、以上3点を挙げている<sup>(2)</sup>。また、「社会参加活動」に近い概念として、「社会貢献活動」という用語も用いられる。その定義について、例えば、京都府条例では、「営利を目的とせず、不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与することを目的とし、自主的に行われる活動<sup>(3)</sup>」であると規定する。しかし、これには企業が行う「社会貢献活動」も含まれるので、本稿では、

地域住民が行うボランティア活動を意味する用語として「社会貢献活動（ボランティア活動）」を用いる。また、総務省は、ボランティア活動を「報酬を目的としないで自分の労力、技術、時間を提供して地域社会や個人・団体の福祉増進のために行う活動<sup>(4)</sup>」と解説していることから、「社会貢献活動」は、「社会参加活動」の概念に含まれるボランティアな活動と解することができる。なお、本稿では、高齢者を表す用語として「シニア」を用いる。

## 1.2. プロダクティブ・エイジングの概念

プロダクティブ・エイジング (productive aging) は、1980年代、アメリカのR. Butlerが提唱した概念である。Butler (1985) は、「多くの人が老いのコストや依存性といったことに関心を示すが、私たちは、より積極的な見地から老いを見つめ、社会において高齢者が持つプロダクティブな能力の活用を強調したい<sup>(5)</sup>」と述べ、プロダクティブ・エイジングの考え方を提唱した。その背景にあるのは、老化をネガティブに見るエイジズムに対する反論であり、Butler (2008) は、加齢 (aging) と生産性 (productivity) とは必ずしも矛盾するものではなく、高齢者は、固定観念や偏見、差別によって阻害されていると述べ<sup>(6)</sup>、高齢者の社会参加をポジティブにとらえようとした。

このプロダクティブ・エイジングの定義についてはさまざまな意見があり、Herzog et al. (1989) は、「報酬が支払われたか否かにかかわらず、家事、育児、ボランティア活動、家族や友人への援助を含むいかなる生産活動や奉仕活動も、プロダクティブ・アクティビティである<sup>(7)</sup>」と述べ、プロダクティブ・アクティビティ、そして、プロダクティブ・エイジングの概念を広くとらえている。プロダクティブ・エイジングを直訳すれば、「生産的に老いること」になるが、齊藤ゆか (2006) は、その意味する

ところは「生産性を保持した状態で高齢期を生きること<sup>(8)</sup>」であると述べており、杉原陽子 (2010) も、「プロダクティブ・エイジングの概念を適切に表す日本語については未だ結論が得られているわけではない<sup>(9)</sup>」と述べていることから、本稿でもカタカナ表記の「プロダクティブ・エイジング」を用いる。

## 2. この研究で明らかにすること

### 2.1. 先行研究のレビュー

#### 2.1.1. 社会参加活動に関する先行研究

堀薫夫ほか (2007) は、老人大学の修了者に対し社会参加活動に関する調査を行った結果、修了者が選んだのは、「講座修了者の同窓会」(58.1%) や「講座修了者のクラブ活動」(49.7%) といった老人大学での新たな人間関係を基盤とする活動であった。堀は、このような講座修了者同士のグループ活動は必ずしも地域活動に転化しないことを指摘し、広域を対象とする老人大学が抱える課題について言及している<sup>(10)</sup>。

また、望月七重ほか (2002) は、高齢者大学の学生と高齢者の一般市民とを比較し、「高齢者大学は、学生のボランティア活動への参加意欲を高め、かつ、多くのボランティア人材の輩出に一定の成果を収めている<sup>(11)</sup>」と評価している。つまり、一般市民である高齢者と高齢者大学で学ぶ高齢者では、ボランティアな活動に対する参加意向に有意な差があることを明らかにしたもので、高齢者大学における学びが地域の社会貢献活動に有用であることを示唆する。

このほか、高齢者大学の学生に関する研究ではないが、馬欣欣 (2012) は、中高年齢者の社会貢献活動の参加動機の形成要因を分析し、社会貢献活動に参加する動機を「利己型」「利他型」「利他利己混合型」の三つに類型化したうえで、「利他型」は社会貢献活動に取り組む割合が大きい反面、ボランティア活動時間は短く、むし

ろ、「利他利己混合型」の方が社会貢献活動に取り組む可能性が高く、ボランティア活動時間も長い傾向にあると述べている。そして、今後、高年齢者のボランティア活動への参加を促進するためには、利他的・利己的双方の動機を刺激し、モチベーションをあげる取り組みが重要になると指摘している<sup>(12)</sup>。

### 2.1.2. プロダクティブ・エイジングに関する先行研究

藤田綾子 (2011a) は、高齢者大学の卒業生に対する実態調査から、卒業後10年以上が経過しても社会参加活動ができる者がいることを指摘し、社会貢献の生き方がプロダクティブ・エイジングにつながる可能性を示した<sup>(13)</sup>。そして、藤田 (2011b) は、高齢者大学においてプロダクティブ・エイジングの志向性を向上させる教育に効果があるのは、講義のみの学習ではなく、健康をキーワードに身体を動かしながらクラスの仲間と学びを共有できる学習であると述べ<sup>(14)</sup>、さらに、藤田 (2013) は、グループ学習は価値観を共有するインフォーマルなグループ仲間を形成しやすく、プロダクティブ・エイジングの志向性を高めると述べている<sup>(15)</sup>。

また、齊藤 (2006) は、プロダクティブ・エイジングを可能にする要因として、(1) 仕事、職業スキルを生かした活動、(2) 家事、介護、育児労働スキルを生かした活動、(3) 趣味スキルを生かした活動、趣味の延長にある活動、(4) 教養、学習・研究の延長にある活動、(5) ボランティア・社会的活動体験および学習を生かした活動など、10項目を挙げている<sup>(16)</sup>。そして、プロダクティブ・エイジングの可能性を生み出す重要な方策の一つとして、「プロダクティブ・アクティビティを誘発し、個々人のモチベーションや意欲・意識を高める『教育』や『学習』の役割<sup>(17)</sup>」を挙げ、今後の研究課題は、プロダクティブ・エイジングの可能性を高める総合

的な学習教材のプログラム開発であり、それを生涯学習体系の中に位置づけることであると述べている<sup>(18)</sup>。

## 2.2. 研究目的

2.1.1.で述べた望月ほかの研究は、高齢者大学における学びが地域の社会貢献活動に有用であることを検証しているが、高齢者大学におけるどのような学びが社会貢献活動（ボランティア活動）の創出要因であるかについて明らかにしていない。また、2.1.2.で藤田は、グループ学習はプロダクティブ・エイジングの志向性を高めると述べ、高齢者大学における学びの中にその可能性を見出している。筆者は、これらの先行研究を踏まえ、神戸市シルバーカレッジをケーススタディに、(1) シニアが在学中または卒業後、社会貢献活動（ボランティア活動）を始めるにあたり影響を受けたと思われる要因を探り、(2) 高齢者大学におけるシニアのプロダクティブ・エイジングの可能性について検証しようと考えた。この二つが研究目的であり、そのための予備調査として、神戸市シルバーカレッジの卒業生に対して面接調査を行うことにした。

## 2.3. 予備調査

2013年3月、神戸市シルバーカレッジの卒業生二人に対して面接調査を行い、卒業後の社会参加活動、社会貢献活動（ボランティア活動）の実態を聞き取った。その結果、調査対象者は卒業後4年から5年が経ち、年齢も70歳台前半であるが、日々、趣味を楽しみ、社会貢献活動（ボランティア活動）を続けていた。なお、予備調査の対象者は、筆者が神戸市シルバーカレッジに在職していた頃に学生であった卒業生の中から任意に選んだ。

さて、面接調査の結果を個別にみると、2005年、65歳で神戸市シルバーカレッジに入学した

A氏(面接時73歳・男性)は、2008年に卒業し、同年、阪神シニアカレッジに入学、2012年に卒業している。つまり、県市の高齢者大学で通算7年間学んでいる。また、A氏は、神戸市シルバーカレッジの「グループ学習<sup>(19)</sup>」のテーマにペタンク競技<sup>(20)</sup>による国際交流を選び、ペタンク発祥の地、南フランスで高齢者と交流試合を行ってきた。さらに、同カレッジ在学中から留学生とペタンクによる交流を行い、その活動は現在も続いている。このほか、趣味の活動では、文化施設で川柳の講座を受講するかたわら句会に参加し、投句も行っている。

一方、2006年、65歳で神戸市シルバーカレッジに入学したB氏(面接時72歳・男性)は、2009年に卒業すると同時にボランティア団体の役員を3年間務め、面接時は、そのボランティア団体が運営する地域会館の責任者を務めながら、同団体の地区代表として活動している。また、B氏は在学中の「地域交流活動<sup>(21)</sup>」がきっかけで地域の公園清掃を始め、その活動は卒業から6年が経過した今も続いている。このほか、趣味の活動では、在学中はカラオケクラブで活動し、卒業後もOBたちと同好会を作り、カラオケを楽しんでいる。

このように、二人の卒業生に対する面接調査からは、高齢者大学を卒業した後も生涯学習機関で学び、趣味を楽しみ、そして、ボランティア活動を続けていることがわかった。

## 2.4. 研究計画および研究仮説

2.2.で述べた研究目的を達成するため、神戸市シルバーカレッジの卒業生に対して質問紙調査を実施した。調査対象者は、筆者が2012年に質問紙調査を行ったかつての「国際交流・協力コース」の学生である。すなわち、今回の調査は、神戸市シルバーカレッジを卒業したシニアの1年後の社会参加活動、社会貢献活動(ボランティア活動)の実態を問う質問紙調査である。

調査に先立ち、前述の予備調査の結果を踏まえて質問紙の設問項目を作成するとともに、「高齢者大学を卒業したシニアの社会貢献活動(ボランティア活動)は、シニアの日々の生活を活動的にする」という研究仮説を設定した。この質問紙調査の結果を分析し、研究仮説を検証することで、(1)卒業生が在学中または卒業後、社会貢献活動(ボランティア活動)を始めるにあたり影響を受けたと思われる要因を明らかにし、(2)高齢者大学におけるシニアのプロダクティブ・エイジングの可能性を見出すことができると考えた。

## 3. 神戸市シルバーカレッジの概要と特徴

### 3.1. カレッジの概要

神戸市シルバーカレッジは、1993年9月、神戸市が設置した高齢者のための生涯学習施設である。約3万㎡の敷地に、延床6千㎡の校舎と4千㎡の農園を有し、その運営は公益財団法人こうべ市民福祉振興協会が行っている。開設コースは、「健康福祉コース」「国際交流・協力コース」「生活環境コース」「総合芸術コース」の4コースで、「総合芸術コース」は、「美術・工芸」「音楽文化」「園芸」「食文化」の4専攻に分かれる。1学年の入学定員は420名で、入学資格は市内に住所を有する57歳以上の市民である。そして、修業年限は3年で、授業はおおむね週2日、年間60日程度である<sup>(22)</sup>。

### 3.2. 学びと課外活動の特徴

神戸市シルバーカレッジの特徴として、次の3点を挙げることができる。

第一は、「グループ学習」である。1年次、2年次は主として講義形式の授業が行われるが、3年次はフィールドワークを取り入れた「グループ学習」が主たる学習となる。その特徴は、自己決定型学習を前提に、グループメンバーが

主体的に学習の進め方やフィールドワークの内容を決め、グループで一つの目標達成をめざす協調学習を行っていることである。

第二は、「ボランティアグループ活動」と「クラブ活動」である。2013年9月現在、29のボランティアグループと46のクラブがあり、授業が終わった後の放課後、学生は活発な課外活動を行っている。それを可能にしているのは、神戸市シルバーカレッジが専用の学習施設を有しており、課外活動にそれらの施設を使用できることである。

第三は、全学生が居住地域ごとに62のグループに分かれて行う「地域交流活動」である。それは、学生が自主的に行う社会貢献活動（ボランティア活動）であり、そのきっかけは、開校10周年目の2003年に行われた「これでよいのかディスカッション」の運動である。授業評価、カリキュラム編成、ボランティア活動の実践など、当時のカレッジが抱える課題やカレッジのあり方を問う要望が学生から湧きあがり、これを受けてカレッジ事務局は学生と真摯に話し合い、そこから生まれたのが「ボランティア活動のきっかけづくり」への取り組みであった。それは、2005年度から学習カリキュラムの中で「地域交流会」として実現し、その後、授業としての「地域交流授業」と課外活動としての「地域交流活動」が学習体系の中に位置づけられた<sup>(23)</sup>。なお、この「地域交流活動」は、グループメンバーの3年生が卒業しても新入生が加わるので、途切れることなく続いている。

## 4. 質問紙調査の実施と考察

### 4.1. 高齡者大学卒業者の社会参加の実態

#### 4.1.1. 質問紙調査の実施

2013年6月、神戸市シルバーカレッジ「国際交流・協力コース」を2012年3月に卒業した87名に対して「卒業後の社会参加活動に関する

表1 性別と年齢構成

(単位：人)

年齢区分	男性	女性	計	%
69歳以下	8	10	18	40.0
70～74歳	16	6	22	48.9
75歳以上	5	0	5	11.1
計	29	16	45	100
平均年齢	71歳	68歳	70歳	—
%	64.4	35.6	—	—

アンケート調査」を実施した。方法は、カレッジ事務局の協力を得て調査対象者に質問紙票を郵送し、回収は返信用封筒を用いた。その結果、46名の卒業生から回答を得たが、そこから欠損値のある回答を除き、有効回答数は45件となった。回答者の性別と年齢構成は、表1に示すとおりである。

設問は、基本属性に続き、社会参加活動の実態を明らかにするため、「生涯学習機関での学び」「趣味の活動」「社会貢献活動（ボランティア活動）」の3設問を設けた。そして、設問の選択肢は、いずれも、「はい」「いいえ」の二者択一とし、「はい」と答えた者に対しては、さらに下位設問を設けた。次に、卒業後の生き方を明らかにするため、「現在の生き方」を問う8設問を設けた。設問の選択肢は四件法を採用し、尺度は、「とてもあてはまる」を4、「ややあてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「全くあてはまらない」を1とした。なお、今回の分析に使用した統計解析ソフトは、IBM SPSS Statistics ver.21およびIBM SPSS Amos ver.20である。

#### 4.1.2. 「生涯学習機関での学び」の実態

「シルバーカレッジ卒業後、シニアのための生涯学習機関で学びましたか？または、現在、学んでいますか？」の設問に対し、26名（57.8%）が「はい」と答えた。つまり、回答者の約6割



表2 卒業後に学んだ生涯学習機関

名 称	人
神戸市老眼大学	17
神戸市老人体育大学	2
兵庫県いなみ野学園大学院	1
阪神シニアカレッジ「国際理解学科」	2
園田学園女子大学	1
シニア専修コース「国際文化学科」	1
流通科学大学「生涯学習の会」	1
神戸山手大学公開講座「神戸学」	2
KOBE環境大学	1
カルチャーセンター	3
その他	2
計	32

(注) 合計人数が26名を超えているのは、一人で複数の学習機関で学んでいるため。

が卒業後も引き続き生涯学習機関で学んでいることがわかった。そして、「はい」と答えた者に対して下位設問でその学習機関名を記述式でたずねた結果が表2である。

内訳をみると、神戸市老眼大学<sup>(24)</sup>を挙げた者が26名中17名にものぼり、一つの学習機関に集中している。これは特異な現象であり、その背景には、神戸市老眼大学が月2回、市の大ホールで開講される講義形式の一般教養講座であり、卒業生が定期的に集まる機会を提供しているという事情がある。

#### 4.1.3.「趣味の活動」の実態

「現在、『趣味の活動』をしていますか?」の設問に対し、回答者45名中42名(93.3%)が「はい」と答えた。つまり、回答者のほとんどが「趣味の活動」をしていることがわかった。そして、「はい」と答えた者に対して下位設問でその趣味の内容を記述式でたずねたところ、97件の回答があった。表3は、回答のあった「趣味の活動」をその態様をもとに七つの類型に分類し、かつ、その活動を始めた時期を「入学前」「在学中」「卒業後」の三つの区分に分けたものである。それによると、スポーツ(テニス、ゴルフ、太極拳、ダーツなど)が24.7%、野外活動(山歩き、園芸、歴史探訪など)が23.7%であり、この二つの「趣味の活動」を合わせると全体の半数近くになる。そして、その後に続くのが、ダンス(社交ダンス、フラダンスなど)13.4%、音楽(合唱、カラオケ、ハーモニカなど)11.3%である。

次に、表3で「趣味の活動」を始めた時期をみると、「入学前」から活動している趣味が44.3%、「在学中」に始めた趣味が42.3%、「卒業後」に始めた趣味が13.4%であった。このことは、回答者の多くが神戸市シルバーカレッジ在学中に新たな趣味に出会い、活動を始めたことを示している。在学中に始めた「趣味の活動」の中

表3 趣味の活動の分類と開始時期

類 型	件数	%	活動を始めた時期		
			入学前	在学中	卒業後
スポーツ(テニス・ゴルフ・太極拳・ダーツなど)	24	24.7	15	8	1
野外活動(山歩き・園芸・歴史探訪など)	23	23.7	8	10	5
ダンス(社交ダンス・フラダンスなど)	13	13.4	4	8	1
音楽(合唱・カラオケ・ハーモニカなど)	11	11.3	4	7	0
日本文化(短歌・俳句・茶道・詩吟など)	9	9.3	3	5	1
その他(囲碁・写真・木彫りなど)	9	9.3	6	2	1
英語・英会話	8	8.3	3	1	4
計	97	100	43	41	13
%			44.3	42.3	13.4

(注) 合計件数が回答者数を超えているのは、一人で複数の趣味の活動をしているため。

で多かったものは、山歩き、歴史探訪、太極拳、社交ダンス、ダーツなどである。また、対象者が「国際交流・協力コース」の卒業生であることから、卒業後も英語や英会話を「趣味の活動」として続ける者が少なくない。

なお、質問紙では、主な「趣味の活動」を三つ以内で記入するよう求めた。その結果、一つ挙げた者が7人、二つ挙げた者が15人、三つ挙げた者が20人であった。このことは、四つ以上の「趣味の活動」をしている者がいる可能性を示唆するとともに、回答者の多くが複数の「趣味の活動」で社会参加している実態が明らかになった。

#### 4.1.4. 「社会貢献活動（ボランティア活動）」の実態

「現在、『社会貢献（ボランティア活動）』をしていますか？」の設問に対し、回答者45名中29名（64.4%）が「はい」と答えた。そして、「はい」と答えた者に対して下位設問でその内容を記述式でたずねたところ、47件の回答があった。表4は、回答のあった活動をその態様をもとに、「パフォーマンス交流型」「サービス提供型」「所属団体貢献型」の三つの類型に分類し、かつ、活動を始めた時期を「入学前」「在学中」「卒業

後」の三つの区分に分けたものである。なお、ここでいう「パフォーマンス交流型」とは、コーラス、ハワイアンバンド、マジックなど、訪問先の施設等でパフォーマンスを披露し、交流する活動をいう。また、「サービス提供型」とは、小学校での学習支援・登下校の見守り、里山保全、地域公園の美化、外出時の介助など、人的サービスを提供する活動をいう。そして、「所属団体貢献型」とは、自治会の役員、団体世話役など、所属する地域・団体において必要とされる役割を果たす活動をいう。

まず、表4で社会貢献活動（ボランティア活動）を三つの類型別にみると、「パフォーマンス交流型」の活動が14件（29.8%）、「サービス提供型」の活動が27件（57.4%）、「所属団体貢献型」の活動が6件（12.8%）であった。次に、活動を始めた時期をみると、入学前から行っている活動が11件（23.4%）、在学中に始めた活動が21件（44.7%）、卒業後に始めた活動が15件（31.9%）であった。さらに、個別の類型ごとの開始時期をみると、「パフォーマンス交流型」の活動は入学前にはなかったが、入学後の在学中に始めた活動が10件、卒業後に始めた活動が4件であった。また、「サービス提供型」の活動については、入学前から行っている活動が9

表4 社会貢献活動（ボランティア活動）の類型と開始時期

		活動を始めた時期				
	類 型	件数	%	入学前	在学中	卒業後
パフォーマンス交流型	マジック・ハワイアンバンド・大正琴などによる施設訪問など	14	29.8	0	10	4
サービス提供型	学習支援・登下校見守り、里山保全、公園美化、外出介助など	27	57.4	9	10	8
所属団体貢献型	自治会役員、団体の世話役、民生委員など	6	12.8	2	1	3
	計	47	100	11	21	15
	%			23.4	44.7	31.9

（注）合計件数が回答者数を超えているのは、一人で複数の社会貢献活動（ボランティア活動）をしているため。

件なのに対し、在学中に始めた活動が10件、卒業後に始めた活動が8件であった。なお、質問紙では、主な「社会貢献活動（ボランティア活動）」を三つ以内で記入するよう求めた。その結果、一つ挙げた者が15人、二つ挙げた者が10人、三つ挙げた者が4人であった。このことから、四つ以上の「社会貢献活動（ボランティア活動）」を行う者がいる可能性は否定できないが、回答者の多くが複数の社会貢献活動（ボランティア活動）をしている実態が明らかになった。

#### 4.1.5. 考察

質問紙調査の分析結果から、神戸市シルバーカレッジの卒業生の社会貢献活動（ボランティア活動）について、次の3点が明らかになった。第一は、回答者の64.4%が社会貢献活動（ボランティア活動）を行っていることから、神戸市シルバーカレッジを卒業したシニアは、社会貢献活動に参加する意識が高いといえる。このことは、2.1.1.で望月ほかが述べた「高齢者大学は、学生のボランティア活動への参加意欲を高め、かつ、多くのボランティア人材の輩出に一定の成果を収めている」という考察とも合致する。第二は、回答のあった社会貢献活動（ボランティア活動）47件のうち36件、実に76.6%にあたる活動が在学中および卒業後に始めていることがわかった。その内訳は、「パフォーマンス交流型」の活動が14件（29.8%）、「サービス

提供型」の活動が18件（38.3%）である。このことから、「パフォーマンス交流型」と「サービス提供型」の活動には、社会貢献活動（ボランティア活動）の創出要因があると考えられるので、そのことは次節で明らかにしたい。第三は、神戸市シルバーカレッジ卒業生の「パフォーマンス交流型」の活動は、在学中の「クラブ活動」の延長線上にあることがわかった。「クラブ活動」で培ったパフォーマンスのスキルで自分も楽しみながら、他者のためにも活動するという形は、2.1.1.で馬が述べた「利他利己混合型」の社会貢献活動であるといえる。

## 4.2. 「社会貢献活動（ボランティア活動）」の創出要因

### 4.2.1. 高齢者大学における課外活動

ここで、シニアの学生が神戸市シルバーカレッジ在学中または卒業後、社会貢献活動（ボランティア活動）を始めるにあたり影響を受けたと思われる要因を探る。そこで、あらかじめ想定される要因として、カレッジの授業と課外活動、つまり、「専門授業（講義）」「グループ学習」「スポーツ授業・共通授業」「地域交流活動」「クラブ活動」「ボランティアグループ活動」に加え、「学友の誘い」「NPOグループわの活動<sup>(25)</sup>」「左記以外（記述）」を質問紙に列記し、在学中または卒業後に始めた活動一件ごとに影響を受けたと思う要因に○印を付す方法を採用した。対

表5 社会貢献活動（ボランティア活動）の創出要因

類 型	要 因									計
	専門授業 (講義)	グループ 学習	スポーツ 共通授業	地域交流 活動	クラブ 活動	ボランティア グループ活動	学友の 誘い	グループわ の活動	左記 以外	
パフォーマンス交流型	2	2	0	0	10	2	1	1	1	19
サービス提供型	0	3	0	8	2	0	2	4	1	20
所属団体貢献型	0	0	0	4	1	1	0	0	0	6
計	2	5	0	12	13	3	3	5	2	45

(注) 合計件数が活動件数を上回っているのは、一件の活動に対して複数の創出要因を回答しているため。



象となった活動は、表4に掲げた在学中に始めた活動21件、卒業後に始めた活動15件、計36件である。これを4.1.4.で述べた三つの類型に分類し、さらに、○印が付された想定要因ごとに整理したものが表5である。

この表からは、神戸市シルバーカレッジ在学中または卒業後、社会貢献活動（ボランティア活動）を始めるにあたり影響を受けたと思われる要因は、「地域交流活動」が12件、「クラブ活動」が13件であったのに対し、「専門授業（講義）」が2件、「グループ学習」が5件であり、授業や学習の影響を受けたという回答者は少なかった。さらに詳しくみると、「パフォーマンス交流型」の活動の創出要因としては、「クラブ活動」が10件と群を抜いて多く、また、「サービス提供型」の活動の創出要因としては、「地域交流活動」が8件と最も多い。

#### 4.2.2. 考察

今回の研究で、神戸市シルバーカレッジにおける社会貢献活動（ボランティア活動）の具体的な創出要因として、課外活動である「地域交流活動」と「クラブ活動」の二つを明らかにすることができた。この結果は、2.1.2.で齊藤がプロダクティブ・エイジングを可能にする要因として、「趣味スキルを生かした活動、趣味の延長にある活動」と「ボランティア・社会的活動体験及び学習を生かした活動」を挙げており、この考察とも一致する。また、2.1.1.で堀が述べているように、講座修了者同志のグループ活動は必ずしも地域活動に転化せず、グループ内の閉鎖的な活動に終始する可能性がある。そこで、高齢者大学におけるグループ活動を、卒業後、地域活動、社会貢献活動（ボランティア活動）に発展させるための「仕

掛け」が必要となる。それが、神戸市シルバーカレッジの場合、課外活動としての「地域交流活動」と「クラブ活動」であるといえる。

### 4.3. 高齢者大学卒業者のプロダクティブ・エイジングの可能性

#### 4.3.1. 社会貢献活動（ボランティア活動）が卒業後の生き方に与える影響モデル

2.4.で述べた研究仮説「高齢者大学を卒業したシニアの社会貢献活動（ボランティア活動）は、シニアの日々の生活を活動的にする」を検証するため、質問紙調査の中の「現在の生き方」を問う8設問について、潜在因子の抽出と定義を行い、次に、共分散構造分析によるパス解析を行った。具体的には、まず、統計解析ソフトSPSSを使って潜在因子の抽出を行った。因子分析はプロマックス回転による主因子法を用い、因子数はスクリープロットから三つと解釈した。抽出した因子（因子負荷量0.3以上）は、それぞれ、因子Ⅰは「他者への働きかけ」、因子Ⅱは「自己への働きかけ」、因子Ⅲは「活動的な生活」と名づけた（表6）。なお、因子Ⅰは、2.1.1.において馬が述べた他者のための「利他型」の活動であり、因子Ⅱは、自分のための「利己型」の活動であるといえる。

次に、因子分析で抽出した三つの潜在因子、

表6 「現在の生き方」の因子分析の結果

項 目	I	II	III
q17地域で支え合う生活をしている	.907	-.109	-.064
q16他の人のために活動している	.693	.227	.069
q12社会貢献活動を身近に感じている	.554	-.023	.084
q15自分の楽しみを持っている	-.188	.813	.061
q14人生の時間の量より質を大切にしている	.094	.750	.007
q19入学時と卒業後では生き方が変わった	.273	.364	-.123
q18定期的に友人と交流している	-.089	.052	.885
q13日々積極的に行動している	.285	-.073	.720
因子間相関 I	-	.381	.642
II	-	-	.537

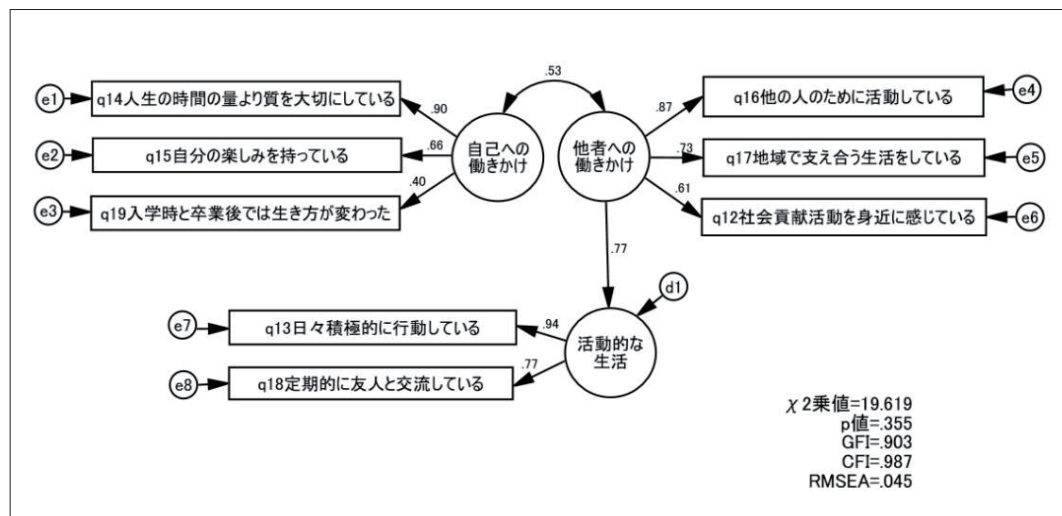


図1 社会参加がシニアの活動力に与える影響モデル

「他者への働きかけ」「自己への働きかけ」「活動的な生活」と「現在の生き方」を問う八つの観測変数 (q12からq19) との関係について、統計解析ソフトAmosを用いて共分散構造分析を行い、社会参加活動が卒業後のシニアの生き方に与える影響についていくつかのモデルを作成した。その結果、得られた最適モデルが図1のパス図である。モデルの適合度は、GFI (適合度指標) =0.903、CFI (比較適合度指標) =0.987、RMSEA (平均二乗誤差平方根) =0.045であり、適合度がよいと判断した。

得られたモデルについて、潜在因子と観測変数との関係をパス係数 (標準化推定値) から判断すると、まず、潜在因子「自己への働きかけ」は、q14「人生の時間の量より質を大切にしている」(.90) に強い影響を与えており、「他者への働きかけ」は、q16「他の人のために活動している」(.87) およびq17「地域で支え合う生活をしている」(.73) に強い影響を与えている。また、「活動的な生活」は、q13「日々積極的に行動している」(.94) およびq18「定期的に友人と交流している」(.77) に強い影響を与えている。そして、それぞれの潜在因子の関係を

みれば、「自己への働きかけ」と「他者への働きかけ」は相関関係にあり、「他者への働きかけ」から「活動的な生活」へと伸びるパス係数は0.77であることから、「他者への働きかけ」は「活動的な生活」に対し強いプラスの影響を与えていることがわかる。なお、「自己への働きかけ」から「活動的な生活」へのパスは非有意なパスであったため、モデルから削除した。

#### 4.3.2. 考察

パス図(図1)からは、「自己への働きかけ」は、人生の時間の量より質を大切にする生き方に強い影響を与えており、それは、Butler (1975) がいう人生で唯一未来のない時期において、残っている時間の量よりも質を重視した生き方であるといえる<sup>(26)</sup>。また、「他者への働きかけ」は、他の人のためにする活動や地域で支え合う生活に強い影響を与えていることから、神戸市シルバーカレッジにおいて学生に引き継がれている「再び学んで他のために<sup>(27)</sup>」の精神のもと、同カレッジでの学びに通底する「福祉文化<sup>(28)</sup>」の思想を地域で実践しているといえる。そして、堀 (1999) が、高齢者大学では友人を多く

つくった者ほど地域活動への参加も積極的であると述べているように<sup>(29)</sup>、「活動的な生活」はシニアの積極的な行動や友人との交友関係に強い影響を与えており、地域における社会貢献活動（ボランティア活動）が卒業後の日々の生活を活動的にしていることがわかった。これらのことから、「高齢者大学を卒業したシニアの社会貢献活動（ボランティア活動）は、シニアの日々の生活を活動的にする」という研究仮説を検証することができ、高齢者大学を卒業したシニアのプロダクティブ・エイジングの可能性を明らかにすることができたと考える。

## 5. まとめ

神戸市シルバーカレッジをケーススタディとした研究で明らかになったことは、次の2点である。第一は、学生および卒業生が社会貢献活動（ボランティア活動）を始めるにあたり影響を受けたのは、在学中の授業や「グループ学習」ではなく、在学中にボランティア活動を実践する「地域交流活動」とパフォーマンスのスキルを培う「クラブ活動」であった。第二は、「他者への働きかけ」である社会貢献活動（ボランティア活動）は、卒業後のシニアの活動的な生活にプラスの影響を与えていた。つまり、高齢者大学を卒業したシニアのプロダクティブ・エイジングは、高齢者大学における課外活動にその可能性を見出すことができる。

この検証結果は、社会貢献活動（ボランティア活動）の実践を取り入れた学習体系と、専用の学習施設を有する恵まれた学習環境の中から生まれたものであることは否定しない。全国の高齢者大学の中には、専用の学習施設を持たず、また、受講者の学習ニーズを反映した講義中心のカリキュラムを提供するところも少なくない。確かに、学習環境の整備は設置者の財源措置と関係するので困難を伴うが、社会貢献活

動（ボランティア活動）の実践を取り入れた学習体系の構築は、学生との協働で実現が可能である。その具体例が3.2で述べた「これでのいかディスカッション」の運動であり、神戸市シルバーカレッジでは、これを機にボランティア活動を実践する「地域交流活動」が学習体系に組み込まれていったのである。

最後に、2.1.2において齊藤は、プロダクティブ・エイジングの可能性を高める総合的な学習教材のプログラムを開発し、生涯学習体系の中に位置づけることが今後の研究課題であると述べているが、神戸市シルバーカレッジの「地域交流活動」は、まさにそれを実践しているといえる。今日の高齢者大学は、従来の趣味や健康、教養など、自己の健康と生きがいのために学ぶ場所だけではなく、社会貢献活動（ボランティア活動）という「他者への働きかけ」を体験的に学ぶ場でもある。それは、高齢者大学がシニアのプロダクティブ・エイジングの可能性を高めるといふ新しい役割を担うことであり、高齢者大学に寄せられる期待も大きい。

## 注

- (1) 内閣府「平成23年度高齢者の経済生活に関する意識調査」2012、p.226.  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h23/sougou/zentai/> (2013.08.08 アクセス)
- (2) 芳賀博「高齢期における社会参加活動の意義」長寿科学振興財団機関誌『Aging & Health』No.61、2012、p.7. [http://www.tyoju.or.jp/Aging&HealthNo.61/\\_SWF\\_Window.html](http://www.tyoju.or.jp/Aging&HealthNo.61/_SWF_Window.html) (2013.07.30 アクセス)
- (3) 京都府「京都府社会貢献活動の促進に関する条例」第1条
- (4) 総務省「平成23年社会生活基本調査 用語の解説」2012、p.8.  
<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/yougo.htm> (2013.07.30 アクセス)
- (5) Butler, R.N., & Gleason, H.P. (Eds.),

- Productive Aging: Enhancing Vitality in Later Life*, New York, Springer Publishing Company, 1985, p.xii.
- (6) Butler, R. N., *The Longevity Revolution: The Benefits and Challenges of Living a Long Life*, New York, PublicAffairs, 2008, p.242.
  - (7) Herzog, A. R., Kahn, R., Morgan, J. N., Jackson, J., & Antonucci, T., "Age Differences in Productive Activities", *Journal of Gerontology: Social Sciences*, Vol.44, 1989, p.130.
  - (8) 齊藤ゆか「日本における『プロダクティブ・エイジング』の可能性」『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』Vol.12-13、2003-2004、p.60.
  - (9) 杉原陽子「1.3 プロダクティブ・エイジング」大内尉義・秋山弘子編『新老年学 第3版』東京大学出版会、2010、p.1631.
  - (10) 堀薫夫・福岡順「高齢者の社会参加活動と生涯学習活動の関連に関する一考察－大阪府老人大学修了者を事例として－」『大阪教育大学紀要』第IV部門第56巻第1号、2007、pp.104-105.
  - (11) 望月七重・李政元・包敏「高齢者のボランティア活動（参加・継続意向）に影響を与える要因－高齢者大学の社会還元活動実態調査から－」『関西学院大学社会学部紀要』第91号、2002、p.188.
  - (12) 馬欣欣「第4章 中高年齢者における社会貢献活動の参加動機およびその活動形態に与える影響」独立行政法人労働政策研究・研修機構『高齢者の社会貢献活動に関する研究－定量的分析と定性的分析から－』2012、pp.73-102.  
<http://www.jil.go.jp/institute/reports/2012/documents/0142.pdf> (2013.08.08 アクセス)
  - (13) 藤田綾子「超高齢社会におけるサードエイジの社会貢献活動のために－高齢者大学での価値共有による仲間づくり－」大阪市『都市問題研究』2011、p.16.
  - (14) 藤田綾子「高齢者のプロダクティブ・エイジング志向性尺度の開発と応用に関する調査研究」『甲子園大学紀要』2011、No.38、p.171.
  - (15) 藤田綾子「高齢者の学習講座参加によるプロダクティブ・エイジング志向性の変容」『甲子園大学紀要』2013、No.40、pp.70-71.
  - (16) 齊藤ゆか『ボランティア活動とプロダクティブ・エイジング』ミネルヴァ書房、2006、pp.280-281.
  - (17) 齊藤、同書、pp.337-338.
  - (18) 齊藤、同書、p.350.
  - (19) 神戸市シルバーカレッジの「グループ学習」は3年次の主たる学習方法であり、学習テーマの設定からフィールドワークの内容まで、すべてグループで決める自己決定型の協調学習である。
  - (20) ベタUNKは南フランス生まれの球技で、ビュット（目標）に向かって金属球を投球し、得点を競うスポーツ競技である。
  - (21) 神戸市シルバーカレッジの「地域交流活動」は、全学生約1200名が居住地域ごとに62のグループに分かれて行う社会貢献活動（ボランティア活動）である。
  - (22) 「神戸市シルバーカレッジ設置要綱」および「神戸市シルバーカレッジ学則」
  - (23) 神戸市シルバーカレッジ情報誌編集部「カレッジ情報誌」No.84、2004、p.13、同誌 No.85、2004、pp.5-6.
  - (24) 神戸市老眼大学は、神戸市生涯学習センターが60歳以上の市民を対象に、月2回、市の大ホールを使って開催する講義形式の一般教養講座である。
  - (25) 「グループわ」は、主として神戸市シルバーカレッジの卒業生で構成するNPO法人である。1997年に設立され、学びの成果を広く社会に還元することをめざし、各種ボランティア活動を行っている。
  - (26) Butler, Robert N., *Why Survive? Being Old in America*, Baltimore, Johns Hopkins University Press, 1975 [2002 paperbacks edition], p.409.
  - (27) 「再び学んで他のために」は校是ではなく、開学当初に神戸市シルバーカレッジに入学した学生の発意から生れた言葉である。その精神は、阪神・淡路大震災を経て、今も学生の間に引き継がれている。
  - (28) 「福祉文化」とは、神戸市シルバーカレッジ開学以来学長職を務める今井鎮雄が、学生に歩むべき道を示す学びに通底する思想である。今井は、人間の欲望を満足させることより、人間が共に「よりよく生きる」ための新たな価値体系の構築を希求し、卒業生が「福祉文化」の社会のつくり手となることを期待する。  
今井鎮雄『時を刻む－今井鎮雄の仕事－』神戸新聞総合出版センター、2006、pp.14-15.
  - (29) 堀薫夫「教育老年学の構想－エイジングと生涯学習」学文社、1999、p.218.